

中国の重慶における国際交流の授業開発 —情報通信技術を利用した試行的な取り組み—

陳 卓君

千葉大学大学院教育学研究科修士課程

本論は、インターネットの Skype という通信技術を使って、日中両国の小学校で国際交流授業プログラムを開発し、国際交流授業の有効性を明らかにした教育学的研究である。その授業は、2つの国のビデオ鑑賞—興味を持つ—生活について楽しく交流・学習という流れに焦点をあて授業を行った。自分と違う国の子どもたちの生活を見たり、交流したりすることで、今までの考え方や思考力、他国への理解・受容することに関して新しく認識することができるかどうかを検証した。また、日本の千葉と中国の重慶の小学校の交流授業を通して、授業では中国の教育の様々な現状を踏まえて、情報通信技術を利用し、国際交流の活動を進め、どのようにすれば効果的な国際交流の活動が学校教育の中で行われるかについて、重慶の子どもたちを中心として分析し、その実践の有効性や改善点を明らかにすることを旨としたものである。

キーワード：国際交流、情報通信技術、インターネット、重慶、格差

1. はじめに

中国では、農村部と都市部の社会的な格差があるだけでなく、都市間の格差もかなり大きくなってきている。その格差の1つに、国際交流のあり方に関する格差が挙げられる。教育に関する国際交流について、大学では、上海でも重慶でも、国際交流の機会が多い。しかし、小中学校では、上海と比較して、重慶では国際交流の機会が少ない。

上海は昔から地理的条件に恵まれており、外国から人が来たり、上海の人が外国に行ったりと、交流がしやすく、国際交流が順調に進んでいる。では、他の地域（特に重慶などの内陸地区）はどのようにすれば国際交流を行うことができるのだろうか。

我々はインターネットが普及する社会において、インターネットなどの通信技術を用いれば、物理的距離が離れていても交流することができる。また、文書だけでなく、動画や音声データの編集や保存、共有なども簡単にできるようになっている。教育においても、インターネットなどの通信技術を用いることにより、他国と交流する機会を生み出すことが可能となる。そのため、地理的条件に恵まれていない地域であってもインターネットなどの通信技術を用いれば国際交流が可能となる。つまり上海であっても重慶であっても、インターネットなどの通信技術があれば、より多くの子どもたちが国際交流

の活動に参加することができ、都市間の国際交流に関する格差も小さくすることができると考えられる。中国の内陸にいる地域の子どもにとって、ICTを積極的に活用することは、外国の子どもとの間の国際交流を盛んにする可能性がある。

本研究では中国の教育の様々な現状を踏まえて、ICTを使って、国際交流の活動を進め、どのようにすれば効果的な国際交流の活動が学校教育の中で行われるかについて具体的な実践を通して、検証する。本研究は、重慶の子どもたちと日本の子どもたちがインターネットを通して交流することによって、重慶の子どもたちが国際交流について興味を持つことができるのかや、国際交流として何ができるのかを検証して、その実践の有効性や改善点を明らかにすることを旨としたものである。

2. 目的

インターネットの Skype という通信技術を使って、日中の小学校で国際交流授業を通して、重慶の児童が国際交流についての興味を高めるのか、相手から何がわかったのかを検討する。また、日中間のインターネット接続状況を検証し、重慶の子どもたちと教師たちの国際交流・自己反省の意識を分析したい。

3. 方法

まず、授業プログラム「日本・千葉と中国・重慶について知ろう」に関して、日本・中国に関する紹介する内容を調査し、これらの内容を理解できる授業案とビデオを

作成する。そして、4回目の実践で抽出児童の話し合いの様子と千葉の児童と交流する様子を、ビデオ・ボイスレコーダーで記録し、交流授業を検証する。また、千葉・重慶の子どもたちの中に内在する国際交流に関する興味・関心、および日本に対して印象を事前のアンケートを通して明らかにし、国際交流(特に日本に対する印象)の意識の変化を分析する。事前、毎回の授業後のアンケート、最後のまとめアンケートの内容の変化と影響を与える要因を探る。最後に、授業の内容の考察について、授業記録の分析・考察し、子どもたちの反応やコメント・アンケートを参考にし、また日本の子どもたちの調査を合わせて、比較し、本授業プログラムの有効性(特に重慶側)や課題を明らかにする。

4. 国際交流の授業プログラムの開発

交流授業をやるのは、教師がどうすれば教えるより、どうすれば引導するほうがより重要だと思っている。ねらいを達成するように、第1時間目に、教師は導入ビデオを再生し、その後の時間(2、3、4時間目)は、教師は補助協力として、授業を行う予定である。その後の内容について、食べる・着る・話すなどの活動や体験を重視すること、子どもたちが主体的に活動できるようにすること、授業の中に子どもたちの発想や考えをより多くを取り入れられるように心がけた。

4.1. 導入ビデオの作成

4.1.1. 「日本・千葉県について紹介するビデオ」10分の作成

ビデオについては、授業の導入の材料として、どうすれば2つの地域の子どもに注目してもらえるのか、及びどこで、何を取材するのかなどの問題点を、授業者は考えた。

たくさんの特徴の中に、まず、日本及び千葉県の特徴を組み合わせたい。日本・千葉県を紹介するビデオ中で、日本の島国、桜、神社、寿司という4つの特徴及び千葉県の水産業・工業・農業の発達という特徴を選択した。なぜなら、日本及び千葉県は多い特徴を持つが、外国人留学生として、授業者は日本及び千葉県でよく体験したものを自分の故郷の子どもに伝えることは、もっと影響を与えることができると思ったからである。

●シーン1 千葉大学で島国、桜を紹介する

自己紹介、島国と言われる日本の国土の特徴の紹介及び千葉の位置の確認(例:日本は本州、四国、九州、北海道という四つの島があり、千葉は本州にある)―国花と言われる桜の紹介、花見の時間の紹介と花見の情景

●シーン2 市原市の飯香岡八幡宮で神社を紹介する

今回の授業の日本側の対象は市原市立白金小学校であるので、市原市の神社で神社のことを紹介したい。神社の起源(神道教の紹介)―具体的参拝のやり方

●シーン3 千葉港で千葉の水産業、工業、農業を紹介する

千葉港についての紹介―千葉県有名な水産物、農産物の紹介(ヒラメ、ピーナッツ、醤油)―千葉県の工業の紹介(鋼鉄工業、重慶の工業も有名である)

●シーン4 寿司店で寿司を紹介する

寿司店の様子・雰囲気―お茶の紹介(粉末の形状、中国と違う)―寿司の紹介(様子、作り方、食べ方、味)

4.1.2. 「重慶について紹介するビデオ」10分の作成

中国は国土の面積が広く、各地域の格差・差異が大きい。その上、中国の民族が多い、国情が複雑なので、単に重慶の特徴を取り上げることにした。

●シーン1 重慶の朝天門と沙平ダム商店街で重慶の概況を紹介する

重慶の歌を歌う―自己紹介―山の町、霧の町―人口と民族

●シーン2 川劇を紹介する

川劇の歴史・特徴―川劇のショーを出す

●シーン3 火鍋の店を紹介する

鍋の歴史―食料・作り方、食べ方―食べる様子

●シーン4 夜景を紹介する

夜景の様子を出す

4.2 考察

考察方法について、以下の内容を説明する。

4.2.1. 事前アンケート

子どもたち及び教師たちの国際交流・日本に関する意識を把握したい。そして「日本」に対して、どのようなイメージをもっているかを考察したいのでために、事前アンケートを用意した。

内容については、「いままで、外国の子どもたちと話した、遊んだこと経験がありますか」という問題から10個問題を設定した。

4.2.2. 授業中のビデオの撮影

1つ重要な考察方法として、撮影の方針は大切だと思

う。子どもたちの全体的な様子を撮るだけではなく、3～4名の子どもを選んで、具体的な目標として分析しなければならない。

4.2.3. 教師用・子ども用のアンケート、インタビュー

毎回の授業が終わる時、その時間目についての状況をすぐに把握するため、教師、子どもたち向けのアンケートをつくる。アンケートの作り方と内容に関するのは、筆者自分自身が設定する目標に基づいて、作っていた。具体的な内容も付録を参照されたい。

4.2.4. まとめアンケート

授業全体の状況の把握及び教師・子どもたちの感想を知りたい、授業前と授業後の子どもたち及び教師たちの意識を比較するため、まとめアンケートを作った。

5. 授業計画

以上のような経過を経て、次の授業を作成した。

●第1次 中国・重慶、日本・千葉について知ろう。

授業者は2つの地域を取材し、撮影する、ビデオを作って、第1次の授業で使う。ビデオを見た後、子どもたちの感想を聞いて、子どもたちの反応を見る。

何か問題があれば、簡単に交流する。

…1時限（重慶・千葉共同）

●第2次 「学校の日」の発表の準備をしよう。

2つの地域の子どもは、それぞれの「学校の日」というテーマを中心として、発表を準備する。そして「もっと知りたいことのリスト」と「一緒にやりたいリスト」を考える。

…1時限（重慶・千葉別々）

●第3次 「学校の日」を発表しよう、相手の質問を答えよう。

2つの地域の子どもは、それぞれ「学校の日」を発表し、お互いに感想を聞く、そして、「もっと知りたいこと」と「一緒にやりたいこと」に関わる交流をする。

…1時限（重慶・千葉共同）

●第4次 ショータイムと一緒にやりたいことをやろう。

子どもたちは自分の特技のパフォーマンス時間である。そして、一緒にやりたいことを事前に準備して、一緒にやる。

…1時限（重慶・千葉共同）

6. 授業の様子（第1次の授業）

第1次の授業を始める前、子どもたちは自分の椅子を持って、マルチメディア教室に来た。子どもたちが全員集まって、座った後、授業者は携帯電話のWeixin¹というソフトウェアを使って、相手小学校の担当者と話し、確認した上、同時に授業を始めた。

授業者：Hello、皆さん、こんにちは。私は日本の大学から来ました、特別授業をする陳卓君です（授業者は自身の名前を黒板に書いた）。重慶の人ですよ！今日は、私たちがやる授業は、特別な授業ですよ。それは、全ての重慶の小学校の子どもたちが未だやったことのない授業ですよ。それは、世界中の子どもたちと友達になって、一緒に交流して、遊ぶ授業ですよ！そして、教材も使いません、ただ単純に他の国の子どもたちと話して、相手の国のことについて知ってみます！

児童：「すごい！」「本当ですか？」「はい！」「よかったです！」と様々な声が聞こえ、好奇心を持っている顔も見られた。

授業者：そうですね！では、今回は、どこの国の子どもたちと交流しますか？これを見てください

授業者は導入として、5つの日本アニメ漫画のキャラクターの写真をスクリーンに投影した。写真の順番は、ちびまる子ちゃん、名探偵コナン、ワンピース、クレヨンしんちゃん、ドラえもんである。授業者の予想していた通り、子どもたちは自信をもって正しく答えた。

授業者：皆さんすごいですね、では、これらの作品を作った国はどこですか？

児童：日本です。

授業者：正解です！今日は、日本の千葉県というところの子どもたちとインターネットで交流しますので、皆さん一緒に楽しみましょう！

児童：はい！（クラス全体が笑っていた）

授業者：しかし、日本及び千葉県はどんな地域ですか？皆さんまだ知らないかもしれませんので、では、一緒に地図を見ましょう。まず日本の地図を出しますね！

授業者：そして、千葉はここです（千葉の地図を出した）。

そして、授業者は千葉県の状況について簡単に説明をした。特に千葉の地図（図1）を出す時、「千葉県は何の動物に似てる？」という質問をした後、子どもたちは積極的に考えて、そのとき子どもAは「犬」だと発言した。授業者もその時、チーバくん²というキャラクターの映像とその千葉県の地図が重なる映像を出すとき

（図2）、子どもたちは「あ、なるほど」「面白い」など、様々な反応が見られた。その後、授業者はチーバくんについて簡単に紹介し、日本語の「こんにちは」、「さようなら」、「ありがとうございました」という単語を教えて、

子どもたちは大きい声で授業者の発音を真似し、やる気に満ちた子どもたちの様子を見られた。

最後のある日本の子どもは「重慶に行ってみたくになりました」と感想を発表した後、重慶の子どもたちは「ぜひ、来てください」と一斉に言った。



図1 千葉県³



図3 授業の様子

その後、千葉を紹介するビデオを再生した。子どもたちは全員映像を注視していた。後ろの子どもたちは音声が多量聞き取りにくかったが、集中して耳を傾けていた。特に、日本の寿司の場面を出す時、子どもたちは「わ！」と反応し、子ども E、F は「美味しいそう、食べたいなあ！」という声があったりもした。そして、子どもの集中力も高まった。

中国と日本は「贈り物の習慣」があるということを考えた上、ビデオが終わった後、千葉側は川劇のマスクを子どもたちに配って、重慶側はチョコボールを記念品として、子どもたちに配った。

ここまでの子どもたちの集中力は良好であったと思うが、記念品を配布した後、子どもたちの全部の注意力は記念品に集中した。具体的な行動は、記念品の様子を見たり、食べたり、周りの子どもと相談する様子を見られた。今回の授業では、途中で記念品を配布したが、一番大きなミスであったと思う。

その問題点について、1時間目の授業で、子どもは新鮮感を持っている様子が見られたので、記念品を配布しなくても、子どもたちのそれについての関心度は決して減らなかったと思う。相手の担任の教師と検討した結果、第4次の授業が終わった後配布したほうが良かったということになった。

その理由は2つあり、第1に授業中に配布するよりも、授業後に配布するほうが子どもたちが記念品を見たり、食べたり時間を十分に与えることができるからである。

第2に、第1次から第4次までの3週間の間に、子どもたちの日本・千葉に対する新鮮感が減ってしまうかもしれない。最後の授業で日本の可愛い商品を配布すれば、もう一度子どもたちの新鮮感を喚起し、実感を伴った理解を促すことができ、楽しさを向上することができると考えられる。そして、配りながら授業者が前時のふ



図2 千葉県のチャーバくん⁴

展開の部分については、事前にインターネット接続を確認したので、大きなトラブルもなく接続することができた。重慶の子どもたちは画面の向こうから、大きな声で「こんにちは」と元気な声が聞こえてきた。そして、千葉の子どもたちも「ニーハオ」が聞こえてきた。その時、全部子どもたちから熱烈な拍手があがった(図3)。

簡単に挨拶した後、授業者は重慶、千葉を紹介するビデオを放映し、両側の子どもたちに視聴させた。

まず、千葉側と重慶側で同時に重慶を紹介するビデオをスクリーンで再生した。重慶の子どもたちは注意深く見ていた。その後、日本側の子どもたちの感想を聞いた。相手学校の担任の先生は、3人を指名し、カメラの前に立たせて、顔が見えながら感想を発表するという形式をとった。日本側の子どもたちは「火鍋はおいしいそう」、「夜景がきれいでした」と言った後、重慶の子どもたちは「はい、おいしいですよ」と自信満々に答えた。特に

り返りをすることを通して、子どもたちは第 1 回の授業内容を思い出させやすいと考える。

その時から授業の雰囲気は騒がしくなった。その後、重慶から千葉についての感想を発表させた。重慶の子どもは「寿司が美味しいそう、食べたいなあ」「神社に行きたい」と言った。特に、もう 1 人重慶の子どもは「寿司が美味しそうです、どのようにして作るのですか?」という質問をした。日本の子どもは「ご飯にお酢を混ぜて作ります。わかりましたか?」と返事をしたが、重慶の子どもたちは「え、そんなに簡単なのですか?」とびっくりしている様子であった。

この点について、千葉側の子どもははっきり答えないので、向こうの担任の先生をもう 1 回確認した。向こうの担任の先生もあまり説明しないので、授業者が重慶の子どもたちに説明した。「ご飯にお酢を混ぜて、そしてこういう風に形を作って、上は魚等をのせます。でもやはり作り方はちょっと簡単に説明することが難しいので、授業が終わった後一緒にインターネットで調べてみましょう」と授業者は説明した。

子どもたちが発表する間、後ろの子どもたちは、ざわざわ話し始めていた。授業者は発表者たちの翻訳を担当しながら、後ろの子どもたちの状態も把握しなければならなかったため忙しく、子どもたちを授業に集中させ続けることが困難になっていった。

もう 1 つ問題点は、千葉側の子どもたちと教師は「寿司の作り方」について、説明不足であったが、授業者自身はそれについての補足の中で、寿司に関する知識も不足だと実感した。よって、今後の交流授業の中、紹介させる内容の知識を事前に勉強しなければならないという課題に残った。

次は子どもたちが自由に交流する時間である。千葉側と重慶側はそれぞれ 1 人を抽選し、交流した。子どもたちは「あなたの名前はなんですか?」「おいくつですか?」「あなたは好きなスポーツはなんですか?」「学校の科目はなんですか?」などの話題を交流した。特に千葉の子どもから「友たちになりたいです、いいですか?」重慶の子どもたちは「はい、なりたいです!」と反応した。雰囲気は非常に盛り上がっていた。

そろそろさよならの時間。重慶側の子どもたちは「さようなら」「また会いましょう」と呼んで、手を何度も振ってお別れをした。

7. 授業の結果

7.1. 第 1 回の授業

第 1 回の授業後、重慶側の担当の先生から以下の感想をいただいた。

・今回の授業の内容の設定はよいと感じた。子どもた

ちは初めてこういう授業に参加するので、目新しい体験だと思われる。そして、子どもたちは日本語について興味を持ったようなので、次回の授業はできれば、もっと日本語を教えたほうがよいと思う。

・子どもたちの積極性については、少し恥ずかしそうな様子であったので、もっと子どもたちの積極性を高める必要がある。次回で、授業を始める前に、子どもたち自身の顔を画面に映し、励ましの言葉を多くかけるなど、励ます行為を行ったほうがよいと考えられる。

・インターネットの接続状況については、相手の子どもたちの顔がはっきり見えないうえ、画面の動きも遅かった。

授業後の子どもたちの感想の記述を見ると、寿司、桜など日本の特徴のものに関心を持った子どもたちがクラス全体の 66.7% (72 名中 48 名) いた。

例えば、子ども G は「いままで、日本についての印象はアニメだけでしたが、今日は授業を通して、(日本の国花は桜、日本の有名な料理は寿司だ)と理解しました」という記述があった。子ども H は「絶対日本に行く!」と書いていた。それについては事前アンケートの調査中「日本について、何か印象を持っていますか?」という問題について、「アニメ」と感じる子どもは 68.1% (72 名中 49 名) であった。そして、授業者は、子どもたちと話をするとき、「日本についての印象は、ただ、アニメ (例えば、授業で表す日本のアニメのキャラクターなど) から理解しているので、日本は、中国とだいぶ違う国だと思います」「実際の日本はどんな様子かわからないです」といった子どもは少なくない。このように、これまでの重慶の子どもたちはアニメで日本を知っていただけでなく、実際の交流を通じて、日本についてもっと理解したことに気づいたようだ。

そして、「白金小学校の子どもたちは、すごく親切で礼儀正しいので、友だちになりたい」と感じる子どもは 30.6% (72 名中 22 名) である。特に事前アンケートの調査中「インターネットを通して、外国の子どもたちと交流するのは、期待ですか?」という問題について、子ども C は「あまり期待しない」と答えて、理由は「興味がない」と回答した。しかし、その授業後の感想文を見ると、「その授業、特にビデオを通して、私はいろいろ分かりました: 日本の桜がきれい、寿司が美味しい、そして、千葉の子どもたちは可愛くて、親切なので、友だちになりたいです、ぜひ重慶に遊びに来てください!」という感想を書いていた。

この結果から見れば、やはり授業前と授業後の感覚にはだいぶ違いがあることがわかる。その子どもの授業中の様子を見れば、最初の挨拶の時間であまり興味がない様子であったが、重慶を紹介するビデオを再生する時、

関心を高め始めて、千葉のビデオを見る時も真面目に見ていた。このように、紹介するビデオを作るのは国際交流授業に対するモチベーションを高め、日本・千葉に対する興味・関心が高くなることを示している。

7.2. 第2次の授業

授業後、重慶側の担当の先生から以下の感想をいただいた。

- ・今回の授業内容の設定は子どもたちにとって難しいと感じた。重慶の子どもたちはグループを作って、一緒に相談する形の授業をやったことがない。しかし、子どもたちが発表のために努力していた様子が見られたので、うれしい。今後もこのような形の勉強を取り入れて行きたいと考える。

- ・子どもたちは少し恥ずかしがっていたため、発表者は笑顔で話したり、もう少し明るくしてほしいと思った。

- ・何も話さず、ワークシートに書いているだけの子ども数も少なくないため、こういった子どもについて事前に把握し、配慮して支援する必要があると思った。

そして、今回の模擬発表をしている間、子どもたちが積極的に発表できない要因として、次の2点が挙げられると考える。

①班（特に班長）の性格が静かな性格であること。

②一緒に話し、発表を作るという勉強活動は中国の小中学校であまりないため、子どもは人前で発表することに緊張し、慣れていないこと。

①に関しては、事前に子どもたちの性格を把握し、外向型の子どもと内向型の子どもを組み合わせて、改善できるだろうと思う。

②を改善するために、日本の子どもたちが発表をしている写真をもってきてもらい、発表のイメージをわかりやすくした。また、討論・発表活動の機会は小学校現場でより増加すれば効果が出ると思う。

授業後の子どもたちの感想の記述を見ると、まず、「初めて自分の学校生活について考えた」と感じる子どもは80.6%（72名中58名）であった。子どもLの感想文は「いままで、自分の一日をどう過ごすかということは全然考えたことがなかった。今回初めて考えました。うれしい!」、子どもMの感想文は「私は朝の音読ということは普通だと思っていたけれど、ほかの国の子どもたちは朝の音読があるかどうか少し興味が沸きました」と書いてあった。

そして、「発表ということも初めてやるため、難しい」と感じる子どもは54.2%（72名中39名）であった。子どもたちの感想文を見ると、子どもDは「グループで討論するのは初めてですので、なにを話したら良いかわ

からないです」という記述があった。子どもNは「初めて班長を担当するので、班員とどうコミュニケーションをとったら良いかわからないです」子どもたちの感想を見ると、やはり中国・重慶の小学校現場では共同で協力して、学習する機会が少ないために、子どもたちの表現能力や、人と相談・協力する能力が低いということがわかる。

7.3. 第3次の授業

授業は概ね計画通りに行われた。授業後、授業者は担任の先生をインタビューして、先生は以下の感想を伝えた。

- ・今回の授業の内容は面白い、特に日本側の子どもたちが発表するとき、子どもたちの集中力は一番高いと思っている。日本の子どもたちの発表と比べて、うちのクラスの発表はちょっと地味な感じ、日本側の子どもの真面目な態度が見られて、うちのクラスの子どもたちは、いろいろ勉強になった。特に、千葉側の子どもたちと比べて、うちの子どもたちは、表現力不足が感じられた。

第3時間目の感想の記述の中で、「(日本・千葉側) 白金小学校の子どもたちの発表はすばらしい、自分の発表は勉強不足です。いろいろ勉強したいです。」という内容での記述がクラス全体の28%（72名中20名）であった。例えば、子どもOは、「白金小学校の発表は凄い、創造力もあって、食べ物とか、部活で作る実物も展示することができるので、本当にすばらしいです!私もこのように発表したいです。」子どもMも「うちのクラスの発表が失敗した!日本側の発表は完勝だ!」というコメントが見られた。

その28%の子どもたちが、日本の子どもたちの長所を認識し、自分たちの不足を考え始めたことは進歩だと思った。他の子どもたちは発表の方法や能力よりも発表の内容に関心が持ったという事実がわかった。それは理解できる小学校の段階は、子どもたちはその発表に関するものについてどのぐらい知っているかを初めてわかった。発表の内容の面白さよりも自分の発表の能力や方法の不足を反省することが重要ではないだろうか。また、中国では、自ら考え表現する教育があまりなされていないため、学校生活について振り返ることが難しい子どもが非常に多かった。よって、授業者は、言葉で誘導するという方法ではなく、他の方法を用いて、子どもたちが発表の能力に関する不足や自らの学校生活を振り返ることの大切さを認識できるよう、これから検討・反省したい。

そして、「白金小学校の学校生活は面白そうで、給食が美味しそうです、羨ましいです」という内容での記述はクラス全体の人92%（72名中66名）であった。例えば、性格が明るいA君は、「プール、動物園、ケーキ

教室など、何でもありますので、とてもうらやましい、日本の小学校に行きたい！体験したいです！」という感想を書いていた。性格が少し内向的 Cさんは「学校が綺麗で、日本の子どもたちは学校の環境をちゃんと守ることが見られた！そして、給食も毎日違うのは本当に良かった！」という感想を書いた。

このように考えている子どもの数が一番多い。今回の授業を通して、それは子どもたちにとって、一番直感的な感情だと思われた。自分の学校生活とだいぶ違うことを発見し、羨ましい感情を持つ子どもの数が一番多いとわかった。逆に、授業が終わった後、相手学校の教師と交流して、中国の「目を守る体操」と「長い昼休み」が相手の子どもたちにとっても、羨ましいことであった。相手側の教師も「目を守る体操」に非常に興味を持って、授業者とそれに関する意見を交換した。

最後に、もう1つ注意する点では、重慶側のクラスの子 Eは「白金小学校の学校生活についてうらやましいですけど、我々は毎日の昼の時、家に帰って、お母さんとお父さんが作った料理を食べられるから、それもよいですよ！」という意見も出して、自分の学校生活について「肯定」的な面も認識でき、「自己肯定」という子どもの心理も見られた。

7.4. 第4次の授業

第4時間目の授業が終わった後、教師及び校長先生にインタビューをした。校長先生は、以下の感想を述べた。

今回の学習は、子どもにとっても私にとっても、凄く興味深いものだった。画面をはっきり見えないことや、動きが遅いこと、授業案の再検討が必要であることなど課題はあるが、このような授業がもっと多くあると良いと思う。次回も楽しみである。

第4時間目の授業は、重慶の子どもの参加人数は68人（4人欠席）であった。よって、68人が事後調査と感想の記入を行った。

事後調査によると、まず「今日の授業は楽しかったですか？」という設問に対して、「とても楽しかった」との回答は60.3%（68名中41名）、「楽しかった」との回答は39.7%（68名中27名）であり、「楽しくない」と選択した子どもはいなかった。理由の記述を見ると「初めて千葉の子どもたちと交流したが、千葉の子どもたちと一緒にやる授業は面白い」という内容を記述した子どもがクラス全体の61.8%（68名中42名）を占めていた。また「千葉の子どもたちは優しくて、友だちになりたい、ショー（組み体操）がすばらしかった」という内容を記述した子どもがクラス全体の38.2%（68名中26名）だった。

また、「このような国際交流の授業は面白いですか？」という設問に対して、「とても面白い」との回答は63.2%（68名中43名）、「面白い」との回答は36.8%（68名中25名）であった。「あまり面白くない」、「面白くない」と選択した子どもがおらず、多くの子どもたちが国際交流の授業に対して面白いと感じていることがわかった。理由の記述を見ると、様々な理由が挙げられていた。例えば、子どもTは「インターネットを通して日本の子どもたちと交流するのは新鮮だ」という内容を書いていた。子どもUは「日本と千葉の特徴を理解することができた。また日本の子どもたちのショーも観賞できて最高だった」という記述をしていた。さらに子どもVは「自分両国の友好のため、努力したという感じがあった」という内容を書いていた。

最後の「この授業であなたは変わりましたか？」という設問に対して、「変わった」との回答は61.8%（68名中42名）、「あまり変わらない」との回答は25.0%（68名中17名）、「変わらない」との回答は13.2%（68名中9名）であった。「どんなことが変わったか」という設問に対しては、「日本及び世界に対して考え方が変わった」という回答が47.6%（42名中20名）、「勉強に関してやる気が出た」という回答が28.6%（42名中12名）、「コミュニケーションをとることが好きになった」という回答が19.0%（42名中8名）であった。特に「日本及び世界に対して考え方が変わった」との回答について、「いったい何が変わったか」とインタビューしたところ、子どもAは「世界の広さがわかった」と述べており、子どもSは「以前は日本に対してあまりよくない印象を持っていたが、今回の授業を通して、日本についていろいろ理解した。印象がよくなった」と述べていた。「日中友好を促進するという感覚があった」という子どももいた。

8. 今後の課題

8.1. インターネットの接続問題

インターネットの接続は進行できたが、画面ははっきり見えない、インターネットの接続のスピードは遅い、反応も遅く、子どもはお互いに待っている時間が長いなども課題もいくつか出てきた。できれば中国でこの通信技術に関する設備がより多くの学校や施設に広がっていつてくれることを期待する。また、言語の壁など交流の際の障壁を解消する手立てとして、相手が画面を見て理解しやすい、大きめの投影機などを用意しておくことが必要であると考えられる。

8.2. 個別児童の問題

アンケートの中で、「また時間があれば、この国際交

流学習を続けたいですか。」「外国についてもっと知りたいと思いませんか。」という問題について、「続けたくない」、「外国について知りたくない」と答えている子どもがいた。1人の子どもは授業を続けたくない理由として、「外国語を喋りたくない」ということがあるとわかった。2人の子どもは外国について知りたくない理由として、「学校の期末試験・自分の成績と関係ない」ということが挙げられると話した。担任からの聞き取りによって、「外国語をしゃべりたくない」子どもたちについて、外国語を話したくない理由を理解・分析し、その問題を解決するためには、子どもたちの個人的な情報を把握しなければならないということがわかった。個別に興味を確かめる手立てをとりながら授業を展開していく必要があったと思われる。

「学校の期末試験・自分の成績と関係ない」という話は、授業者は校長先生・銅梁教育部の先生と相談した。やはり子どもたちと両親には中国における「成績至上」という考えの影響を受けている人もいるため、少数ではあるがこのような考え方が存在していた。授業者も、そういった考え方の人にも理解してもらうために、よりよい授業・教材を考えていくことを今後の課題としてあげておきたい。

8.3 今後の研究及び交流内容の検討

なぜ日本の方は寿司・桜が好きなのか、なぜ日本の神社が多いのか、なぜ千葉県の農・工業が有名なのかなど、このように考えている子どもたちは少ない。今までは子どもたちは日本・千葉について興味があったが、また、それに関する歴史的・文化的な影響などの理解が進み、日本と中国どのように理解・交流していけばよいかということも知識として定着していきたい。また、国際的な社会では、国際理解、国際交流が大切である。特に日中両国は、お互い繋がる場所が多い、今や内容豊かな相互依存関係を築いており、日中関係はその何れの国にとっても極めて重要な2国間関係である。筆者は、21世紀における日中関係を考えると、改めて両国の交流、相互理解の大切さ、子どもたちの交流が大切になっていることを強く感じている。よって、今後の研究で、日本について興味を持つことだけで終わらずに、お互いに理解、勉強し、国々の価値観・人生観を分析・思考、深めて理解でき、積極的共存することができるようにするため、それを行動に移すようにするための新たな授業プログラムを生み出して行く必要があると考える。さらに、うまく情報通信技術を授業で利用するため、それに関する通信技術及び関連ソフトウェアの知識を勉強し、インターネットをうまく通じる情報収集し、接続しやすいインターネットの環境を作りたい。

¹ 「Weixin」は無料のメッセージングアプリで、テキストチャットやボイスチャット、画像共有、複数での同時コミュニケーションが出来、友人や家族の間でのコミュニケーションが楽しむことが出来る。 <http://gendai.ismedia.jp/articles/-/31745> 5000万ユーザーを抱える、声でつながるメッセージングアプリ「Weixin」、(最終閲覧日 2013.1.9)

² チーバくんは、千葉県のマスコットキャラクターである。2010年開催のゆめ半島千葉国体・ゆめ半島千葉大会のマスコットキャラクターとして考案され、2011年1月1日に千葉県のマスコットキャラクターとなる。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/kouhou/miryoku/chi-ba-kun/profile.html>、(最終閲覧日 2013.1.9)

³ <http://www.mapion.co.jp/map/admi12.html>、Mapion、都道府県地図、(最終閲覧日 2013.1.9)

⁴ <http://locanew.blog.fc2.com/blog-entry-156.html>、千葉県のチーバくん、県公式マスコットとして再就職へ、(最終閲覧日 2013.1.9)

引用文献

- 黄荣怀、陈美玲、曾海军、鄧红艳 (2004) 「中国の小中学校において ICT の応用現状と発展」、p16
- 成瀬喜則 (2003)、「地域理解を目的とした英国とのテレビ会議交流学習」、年会論文集、pp27-35
- 彭怡 (2007)、「我国中小學生創造力低下原因探析」、基礎教育研究第8期、p2
- 大塚薫 (2008)「SNS を利用した日本語作文授業の試みー対面教育及び遠隔教育を統合した授業」高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要 第2号
- 蔡秋英 (2010)「中国における国際理解教育の現状と課題ー小学校教科<品德と社会>を中心として」 広島大学大学院教育学研究科紀要 第2部 第59号
- 崔銀姫、北村順生、坂田邦子、小川明子、茂木一司 (2005)「異文化交流とオルタナティブなコミュニケーション回路の構築ー「ローカルの不思議」プロジェクト、日本教育メディア学会誌「教育メディア研究」